

第2回 琵琶湖活用推進検討会議 概要

1. 会議の概要

- ◇日 時 平成29年10月2日(月) 14:00~16:00
- ◇場 所 県庁本館 4-A会議室
- ◇出席委員 10名(欠席3名 井手委員、大橋委員、中村委員)
- ◇議 題 活用の現状について、「琵琶湖活用のあり方」骨子について 他

2. 「活用のあり方」骨子への主なご意見

1. 検討の趣旨について

- ① 「活かす人」と「守る人」がイコールになるのが理想だが、最初は別々である両者の間を「結ぶ人」「つなぐ人」を想定すると循環が生まれる。
- ② 誰に向けた「あり方」なのかを明らかにする必要がある。県民や県内企業はもちろん、下流域や全国に対しても琵琶湖の価値の訴求が必要
- ③ 発信の手法は大切に、いかにも行政的な標題の報告書があっても誰も読まない。「ナントカ作戦」といったソフトな表現や、カタカナ・郷土ことばの使用など、目を引くキャッチーなニックネームの工夫を。
- ④ 琵琶湖の恵みを単に利水治水ではなく「生態系サービス」と広く捉えることは重要で、これまでの琵琶湖の見方を変える視点。国交省だけによる管理ではなく、農林水産や文化などに広く関わるものであることの再認識につながる。

2. 琵琶湖活用の現状と課題について

- ① 琵琶湖活用の現状については、湖沼会議や国際貢献など「国際交流」の視点を。
- ② 周囲の森林で働く人たち自身に、琵琶湖の保全に貢献しているという森林の価値を伝える工夫が必要。その価値が当事者にもさほど認識されていないと感じる。
- ③ 水草やオオバナミズキンバイ等、琵琶湖には未解決の課題が山積している。活用と保全が別に動くのではなく、県庁内での協働をしっかりとしたい。

3・4. (1) 価値を「知るしくみ」関係

- ① 「滋賀には何もない」という県民が多いが、活用の基礎として、まずは「琵琶湖こそ宝である」ことを広く認識いただくことが必須
- ② 「森川里湖をつなぐ」は重要なキーワード。この普及にどう貢献できるか。
- ③ 都市部の若者は正直、滋賀や琵琶湖にほとんど関心がないのが現実。他府県市でおもしろい動画を配信し、SNSで何万回も拡散されているような事例があるが、多少ふざけた発信でも、まずは若者に興味を持ってもらうことが必要

3・4. (2) 魅力に「関わるしくみ」関係

- ① 湖上スポーツの体験イベントを開催したが、参加者には湖上スポーツが初体験だという人が多かった。琵琶湖はポテンシャルこそあるが、実際に体験ができる機会が少ない。
- ② 湖岸のカフェなどのロケーションの良さが、あまり知られていない。
- ③ 「食べれば食べるほど、琵琶湖がきれいになる」として、湖魚を食べるツアーを企画しており大変人気。山と里を見て湖をかんがえるツアーや、水源のトレイルの山歩きなども実施している。
- ④ 東京でのインバウンドにかかる商談会で、「和菓子づくり体験」は人気なのに、「湖上レジャー」は今ひとつだった。どこの地域も同じようなメニューを提供しているので、「琵琶湖ならではの」体験を再度考える必要がある。
- ⑤ 「学ぶ」上では、琵琶湖総合開発やせつけん運動など琵琶湖の「歴史」も重要
- ⑥ 県内各所での学習機会や体験メニューなどを、総合的に発信するツールがあればよい。

3・4. (3) 活用を「続けるしくみ」関係

- ① マンパワーとして、「よそ者の力」を借りることが必要だとのメッセージを。
- ② 「活かす人」は地域でお金を消費し、「守る人」はお金を使って保全をしている。今はこのお金が違う色なので、この双方のお金を同じ色にするような経済的合理性を作っていくことが、好循環を生むように感じる。

【以上】